

第6章 全体のとりまとめと今後の課題

私立大学で獣医学教育を展開している5大学は私立獣医科大学協会を組織し、獣医学教育・研究の充実、改善を目指して継続的に相互評価を実施してきた。5校は各大学において建学の精神と教育理念を掲げ、高度専門職業人としての獣医師を養成するために、それぞれの大学の特色を生かしながら臨床教育を重視した教育を行っており、(財)大学基準協会の獣医学教育の基準は満たしていないものの、各大学で50～60人の教員が比較的バランスのとれたカリキュラムの基で獣医学教育を実施している。また、5大学ともに教育病院として新しい附属動物病院の改築を行い、新しい診療施設を使用して臨床教育の充実を図っている。このように日本における獣医学教育は私立5大学が先導的な状況で行われて来たと言っても過言ではない。しかし、獣医学教育、特に私立獣医科大学での獣医学教育を取り巻く国内外の状況は色々な面で厳しさを増している。

獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議による「今後の獣医学教育の改善・充実方策について」が平成23年3月に取りまとめられ、公表されているが、この中で国際水準の獣医学教育の実施に向けた改革工程として4つの観点から記載がなされている。独立行政法人としての獣医系国立大学においては鹿児島大学と山口大学間、北海道大学と帯広畜産大学間、東京農工大学と岩手大学間で教育研究体制の整備を図るため共同学部や共同学科など共同教育課程の設置が具体的に提示されている。これらの共同教育課程では、学生数60～80名に対して教員数も60～80名となる。これらの教育体制が実施されれば、今までの私立大学における教員数のスケールメリットを生かした教育の利点は少なくとも同程度になると考えられる。また、モデルコアカリキュラムの提示とそれに基づく各大学でのカリキュラム改革が求められている。私立獣医科大学では現時点でも大部分の項目について対応が済んでいると考えられ、教育の遂行上あまり大きな影響はないと思われるが、一部の科目・分野においては早急な対応が必要になる場合も考えられる。さらに、モデルコアカリキュラムはある面で、私立大学各校において今まで行われてきた独自性の高い教育の足かせとなることも危惧される。

獣医学教育の質保証のための第三者評価の導入とその実施についても私立獣医科5大学は現状で対応が可能と考えられるが、共用試験の導入・実施については私立大学5校では学生の数が80～120名と多いため、どのような形式で実施されるかによっては影響が大きいことも予想される。国立大学での実施プログラムとは別個の私立獣医科大学協会としての取組の検討も必要と考えられる。

「今後の獣医学教育の改善・充実方策について」では社会的ニーズと現状における獣医師の職域偏在や地域的偏在への対応や獣医師として求められる実践的な力を育む教育(実習科目など)での課題が指摘されており、農林水産省も参加型臨床実習についての各大学での体制作りを求めている。

上記のような状況を鑑み、私立獣医科大学協会では臨床ならびに衛生学実習について相互評価を実施することとし、私立獣医科大学における臨床ならびに衛生学実習に

関する相互評価報告書を第6次の相互評価としてこの度公表することとした。

私立獣医科大学各校では以前に比較して教員数は増加しているが、(財)大学基準協会の獣医学教育の教員数基準には達していない。特に、獣医学臨床教育について考えると、伴侶動物医療については1次診療から高度先端獣医療まで、産業動物医療については個体診療から群管理に加えて、予防衛生・感染症対策などとそれぞれの分野で非常に異なった概念の広い教育内容が含まれ、それに対応した実習内容の教授が必要となっている。さらに、参加型臨床実習では教員当たり少人数の学生での実習が必要となり、より一層臨床系教員の増員が必要である。また、この際には附属動物病院の活用が求められることになり、診療の支援要員と教員間での臨床教育についての協力体制を如何に構築していくかが早急に解決されなければならない。これらの観点から、私立5大学間での臨床実習教育の協力体制を構築することが必要と考える。

臨床講義科目の専門科目に占める単位の割合は日獣大が30.5%と高く、麻布大が18.7%と少なく、他3大学は21.3~26.3%であった。臨床実習科目の専門科目に占める単位の割合も日獣大が39.8%と高く、麻布大は6.0%と低かった。

日獣大では臨床科目の割合が講義、実習単位とも30%以上と高く、臨床課目重視の姿勢がうかがえる。一方、麻布大と日大では臨床実習単位の割合が6%と7.9%と全体の1割以下であった。

臨床科目を実施するうえでの私立獣医科大学5校の教員数を考えると、私立獣医科大学における獣医学科専任教員数は平成10年度と比較して24人増加しているが、臨床系教員については全体で7名しか増加していない。各大学の臨床系教員数は日大が22人、北里大21人、酪農大19人、日獣大18人、麻布大16人であり、臨床系教員数と非臨床系教員数の比率では日大が50%と最も多く、麻布大が27.1%と低く、他3大学では30.0~38.9%であった。

動物病院の専任教員が獣医学科教員に含まれていないなど、教員組織における獣医学科専任教員の取扱に違いがあるため、教員数の単純な比較は難しいが、日大では臨床科目数に比して臨床系教員の割合が多く、少人数教育の実施に適合した配置がなされていると考えられるが、日獣大では臨床系科目数の割には教員数がそれほど多くなく、臨床系教員の教育負担が大きいことが予想される。また、全国的に臨床系教員の不足が指摘されているので、私立獣医科大学協会として臨床系教員の拡充とその養成の具体的な取組みが急務の課題と考えられる。

臨床実習で使用される動物種ならびに動物病院での症例数の調査から、酪農大と北里大では産業動物と伴侶動物の両方の臨床実習がバランス良く実施されていると考えられるが、日獣大と日大では産業動物の症例数が極端に少なく、キャンパス内ではこの分野の実習は十分行われていないと考えられる。首都圏に位置する獣医科大学ではその設置場所から考えて、今後産業動物の症例数が顕著に増加するとは考えにくく、産業動物獣医師育成が社会的ニーズとなっていることを考慮すると、学外施設の利用とともに、他大学での産業動物医療実習の協力体制の構築も必要と考える。

2009年11月には国際獣疫事務局(OIE)から「より安全な世界のための獣医学教育の新展開」勧告が提示されている。この中には全世界的な感染症対策、動物衛生と福

社の向上、コアカリキュラムモデルの作成、動物の健康、人の公衆衛生、環境衛生を一つとする新しい理念の実行などが記載されている。したがって、本相互評価では公衆衛生学を含む衛生学関連の実習教育についても検証を試みた。

衛生学関連科目は応用系の教科目であり、必ずしも独立した科目体系で教授されているとは限らず、衛生学関連科目については各大学での判断に委ねたため、必ずしも実態を正確には反映していないかもしれない。しかしながら、衛生学関連教科目名や単位数の調査と担当教員数はある程度対応していることから一定程度各大学の状況を反映していると考えられる。

各大学の衛生学担当教員数は日獣大 5 名、北里大と麻布大 7 名、日大 10 名、酪農大 11 名の順であった。酪農大と日大では全教員に対する比率が 20%程度で衛生学関連教育を重視する姿勢がうかがえる。

衛生学関連科目については講義・実習とも酪農大と日大で多く、これは衛生学担当教員の割合が両大学で多いことと一致し、この分野科目重視の姿勢がカリキュラムからも示された。次いで麻布大の割合が高く、北里大と日獣大では選択科目を加えても衛生学関連講義単位数は他 3 大学よりも少ない。現在獣医学教育では衛生学関連科目の社会的要請が大きく、授業内容を検討しながら、不足している大学では教育・教員の充実が必要と考えられる。

18 歳人口の減少に伴い、私立獣医科大学への受験生は有意に減少しており、入試制度の改正などを行って、受験機会を増加させるなどしているため、志願者数の正確な評価は難しいが、実質的な志願者数はピーク時の半数近い数になっていると考えられる。一方、志願者数が減少している割には国家試験合格率や留年率などにそれほど大きな変化が認められないことから、現時点では成績的に優秀で、目的意識を有する学生が入学していると考えられる。しかしながら、低年次学生で単位未修得者が増えるなど、学力に格差がある学生が入学しているとの指摘もなされており、今後はよりきめ細かい在学生の修学指導が必要になると考えられる。

本相互評価では私立 5 大学において実施されている特色ある実習教育を調査し、将来的に 5 大学間での実習教育の協力関係を構築するために必要な基礎的データを収集した。獣医学教育を取り巻く環境の急速な変化に対応するために、本報告書が私立獣医科大学におけるこれからの獣医学教育の改善と充実のために活用されることを願っている。

III 第6次相互評価調査に関する各大学における自己評価

私立獣医科大学協会では実施している相互評価では、調査項目について今後の改善を図るために、加盟5獣医科大学での自己評価を実施している。第6次相互評価では主として臨床実習と衛生学実習を対象としているが、教員構成や教育支援者などについて、以前の調査時から改善されているかについて相互評価を行ったので、これらの項目についても自己評価を行った。

評価は4段階とし下記のような基準で行った。

A：適切／概ね適切である／改善された

B：適切な部分が多い／改善された部分が多い

C：適切でない部分が多い／改善されていない部分が多い

D：適切でない／改善されていない

I 臨床実習教育および衛生学実習の目的・目標

1-1 臨床実習の理念・目的・目標

①大学、獣医学科の理念と教育目的・目標に沿った臨床実習が設定（科目や内容など）されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	建学の理念に基づいた産業動物獣医師育成のための臨床実習科目はほぼ適切に設定されている。また、高度な専門職業人としての伴侶動物ならびに生産動物獣医師を養成するための科目についてもほぼ適切に設定されている。
北里大	B	獣医学科の理念の一つである「伴侶動物や産業動物の獣医療の充実」を達成するために、小動物（伴侶動物）および大動物（産業動物）関連の実習を広範に設定しており、適切な部分が多い。
日獣大	B	「愛と科学の心を有する質の高い獣医師の養成」を教育理念・目標に掲げている。基礎、応用系の教育は十分と評価できるが、臨床実習は残念ながら十分とはいえない。
麻布大	A	建学精神の「学理の討究と誠実なる実践」の理念のもとに、大学附動物病院にて臨床の実践・実務能力を伸ばす臨床実習を行っている。生産獣医系分野では、産業動物臨床実習という科目を設定し、附属動物病院に入院している患畜を用いて参加型臨床実習を実施している。
日大	A	設定されている。自主創造の本学教育理念に沿い、一部臨床実習ではある程度自主的に実習項目を設定できる様にしている。最低限の学習必要事項を設定し、更に各自で考えたプログラムを取り入れられる様にしている。その他の実習科目においても、シラバスに準じて内容を設定している。また、本学科卒業生の多くが、小動物臨床分野を志向している現状を踏まえ、小動物外科および同内科の基本的事項を中心の実習内容としている。

②臨床実習の目標・方針は、学習者の要求や社会的要請に合致しているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	社会的ニーズの高い産業動物獣医師育成のための臨床実習の目標・方針はほぼ合致している。また、伴侶動物臨床実習についてもこの分野を希望する学生の要求に沿った実習目標が設定されている。
北里大	B	目標・方針は、小動物や大動物の獣医療の充実に必要な基本的知識や手技の習得に主眼が置かれており、学習者や社会的要請に合致している部分が多い。しかし、高度化する小動物医療への要望に十分に対応し切れていない点などもある。
日獣大	B	小動物臨床志向の学生が多く、その希望に合わせた形のカリキュラムにやや傾いているのが現状で、産業動物臨床獣医師を多く求める社会的要請に十分に応えているとは言い難い。
麻布大	A	大学附属動物病院のホームページやパンフレットでの公表によって病院広報で高度な獣医療を実践するとともに、附属動物病院に来院する症例を教材に臨床教育を実践している。 現場の獣医師から診療依頼を受けた患者を用いて実習を行っており、社会的要請に合致している。本学では卒業後の進路として臨床獣医師を目指す学生が多く、臨床実習に対する評価はよい。
日大	B	概ね合致している。卒業後の進路の約6割を小動物臨床の占める実情に基づき、小動物外科および同内科他関連諸科目の習得に、十分な配慮を払っている。しかし、産業動物臨床実習は、小動物と比べ配分時間が少ないため、改善の必要がある。産業動物の広域伝染性疾患に対し我が国は、防圧義務の国際的一翼を担っており、産業動物臨床教育に、一層の充実・促進を図る必要がある。

③臨床実習の目標・方針に沿ったアクション・ポリシーが明確になっているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	獣医学科設立の理念が明確であり、それに沿ったポリシーとなっている。また、2008年度に開始されたカリキュラムではそれぞれの分野でより目標に沿った専修教育を実施することとしている。
北里大	B	獣医学科の理念を考慮し、臨床現場において必要な基本的な知識と手技を習得できるように実習内容が組み立てられており、適切な部分が多い。
日獣大	B	学是、教育理念で、大学としてのポリシーは明確になっており、学生にも十分に伝わっている。それに合わせたカリキュラムへ変更中（24年度入学生から実施の予定）
麻布大	B	臨床教育の充実を図るため、臨床系教員および動物看護師、特任教員等の病院スタッフの増員と診療設備の充実を図ってきた。大方、履修要綱（シラバス）に掲げた実習が行えているが、個々の実習学生が抱える臨床課題を解決させる体制には不十分である。また、産業動物臨床に従事する教員の補充は要望済みであるが、確約されたものではない。
日大	A	各実習科目において、目標や方針に沿ったポリシーはシラバスによって明確化されている。

④臨床実習の目標・方針が学生および教員に周知されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	それぞれの実習科目の目標や方針はシラバスなどに記載され、学生および教員に周知されている。
北里大	B	目標・方針は、シラバスに記載されており、学生および教員に周知されている。
日獣大	C	臨床教育の講義、実習の中で産業動物臨床の重要性を繰り返し強調している割には、国際社会における産業動物獣医師の仕事の必要性・重要性を十分に認識している学生が少ないように感じる。
麻布大	A	学部教授会や病院内での各部門会議や病院運営会議、ならびに系会議等の協議で、臨床教育の目標設定や方針を決定しているため、教員への周知は十分行われている。また 学生に対しては、履修要綱（シラバス）等や病院実習ガイダンスで周知している。
日 大	A	十分に周知されている。実習の目標や方針に関して、シラバス等を学生に事前に配布し、さらに実習前の講義で周知徹底を図っている。

I-2 衛生学実習の理念・目的・目標

①大学、獣医学科の理念と教育目的・目標に沿った衛生学実習が設定（科目や内容など）されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	獣医学科の理念と教育目的・目標に沿った組織改編ならびにカリキュラム作成を行った。
北里大	B	獣医学科の教育目標の一つでもある産業動物の疾病予防の知識と技術を習得するための実習項目と内容が設定されており、適切な部分が多い。
日獣大	B	獣医師は公衆衛生を通じ人の健康を守るという理念は学科の教育目標にも掲げており、学生にも十分に浸透している。
麻布大	A（家畜衛生学・家畜伝染病学） B（公衆衛生実習）	本学のディプロマ・ポリシーは臨床、予防衛生、公衆衛生に対応できる専門家としての実践能力を修得させることを主な柱としている。獣医学部の教育理念・目的に基づき、獣医師としての科学的思考力と応用能力を展開させ、生命と福祉にかかわる科学者としての社会的使命を遂行できる能力及び動物の生理や病態、疾病の処置とその予防、並びにヒトと動物の感染症、動物性食品衛生及び環境衛生に関する科学的知識を併せ持つ人材の養成を目的とし、衛生学実習はその目的・目標に沿って科目や内容が設定されている
日大	A	本学の教育の理念・目標である、広範な職域に対応できる獣医師を養成するために、衛生学分野の実習科目である獣医公衆衛生学実習、獣医衛生学実習、獣医伝染病学実習、魚病学実習、実験動物学実習、獣医毒性学実習が設置されている。

②衛生学実習の目標・方針は、学習者の要求や社会的要請に合致しているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	国家試験に合格するために必要な知識の賦与という点では学習者（学生）の要求はほぼ満たしているといえる。反面、国家試験以外には必要でない知識を習得するために、実際に社会に出てからは有用な知識や技術習得の時間が不足している面もある。
北里大	B	衛生学実習の目標・方針は、産業動物と広く動物の予防衛生領域をカバーし、現在問題となっている疾病を想定した実習内容となっており、学習者の要求と社会的要請に対して、適正な部分が多い。
日獣大	C	公衆衛生、家畜衛生などで用いられる技術の習得に関しては十分と考えられるが、疫学分野の教育・実習が十分とは言えない。
麻布大	A	「家畜衛生学実習」と「家畜伝染病学実習」の2科目を習得することにより、疾病診断と疾病予防に対応が可能となる。例えば、昨年に宮崎県で発生した口蹄疫など家畜伝染病、届出伝染病をはじめ産業動物臨床現場で日常的に発生している疾病について網羅した実習内容となっているので、これら2科目の実習に対する学生の要求に充分に対応しているもので、かつ社会的要請に合致しているものである。 また、「獣医公衆衛生学実習」の食品衛生、ヒトと動物の共通感染症、環境衛生等に取り組める基礎を培うという目標・方針は、学習者の要求や社会的要請に合致している。
日大	A	これまで、“衛生学実習”という区分として統一した目標・方針の決定は行われていないが、各科目は獣医学科の教育理念・目標に沿って設置され、学習者の要求や社会的要請を参考に随時見直しが行われ、毎年の科目シラバス作成・改善に組み入れられている。

③衛生学実習の目標・方針に沿ったアクション・ポリシーが明確になっているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	各科目のシラバスが公開されており、アクション・ポリシーが明確に示されている。
北里大	B	衛生学実習の目的・方針は、家畜保健衛生所において日常的に実施されるであろう検査にも理解・対応できるような実習項目を選んで実施しており、応用力を付けることを目標としている。
日獣大	B	3, 4年次での技術の習得のための実習、5, 6年次での総合臨床実習とのセットで臨床応用実習としての衛生学関連の実習を実施しており、衛生学関連の実習の重要性を明確にしている。
麻布大	A(衛生・伝染病) B(公衆衛生)	講義の担当者については、生産獣医学系の系会議で確認の上決定し、授業科目や実習内容等の教育全般については、系会議で検討・確認する教育体制が実施されている。実習の目標・方針に沿ったアクション・ポリシーは、シラバスに記載されており明確になっている。
日大	A	それぞれの科目については、シラバスによって明確化されている。

④衛生学実習の目標・方針が学生および教員に周知されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	各科目のシラバスが公開されており、目標・方針が明確に示されている。
北里大	B	衛生学実習の目的・方針についてはシラバスに記載されており、学生と教員に周知されている。
日獣大	B	新しいカリキュラムの中でうまく機能している。周知は十分である。
麻布大	A	シラバスを毎年作成し、環境獣医学系の会議などで協議を行っている。年度初めには「学年ガイダンス」を実施し、また、各実習科目においては、最初の実習において「実習ガイダンス」を行い、実習予定表を配布・掲示している。当該年度の実習分担教員に対しては、実習予定表を配布し実習内容の確認を行っている。また、学外などでの見学実習を実施する場合には、その趣旨を理解の上、時間的な調整(融通)に協力をお願いしている。
日大	A	それぞれの科目については、シラバスによって学生および教員に周知されている。

II 教員構成

II-1 全体

①教員組織は改善されたか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	5 専門教育群（生体機能、感染・病理、衛生環境、生産動物医療、伴侶動物医療）がそれぞれの損門教育分野について責任を持つ教育体制とした。教員数全体としては前回調査時よりも増加しており、特に食品衛生学、獣疫学、環境衛生学など公衆衛生分野（衛生・環境教育群）の教員数と伴侶動物医療教育群について増員されたが、特定の専門分野（特に伴侶動物医療教育群）については不十分なままである。年齢構成については積極的に若手教員の採用を目指しており、ほぼバランスのある構成と考えられる。獣医学科教員は原則専任である。
北里大	B	前回調査に比較して教員数が増員され、研究室体制の再編成を実施したことで改善された部分が多い。しかし、年齢構成には偏りがあり、改善すべき部分もある。
日獣大	C	専門分野に関してアンバランスも多い。数も十分でない。特に実習を主として実施する若手（30 歳代）の教員数が少ない現状である。
麻布大	C	H19 年 4 月に動物病院が大学附属に組織替えされ、6 名の専任教員体制となった（新規採用教員 2 名、旧獣医学部附属動物病院からの移籍教員 2 名、及び獣医学科臨床獣医学系からの移籍教員 2 名）。これらの教員は獣医学科教育を兼務しているが、臨床獣医学系から移籍した専任教員の欠員枠は補充されていない。 他は退職者分の補充程度であり、また若い教員が少ない。
日 大	C	臨床系教員数は確保され、また学生数に適合した教育環境は整備されている。いっぽう基礎系、応用系の教員数については、不十分であり改善が求められる。

②女性教員数は改善されたか？*第 1 次相互評価では女性教員数が極めて少ないことが指摘されている。

大学名	評価	コメント
酪農大	C	前回調査よりも女性教員数は増加したが、10%以下であり、更なる改善が必要と考えられる。
北里大	C	教員採用時には女性教員を積極的に採用する方針ではあるが、十分には改善されていない部分が多い。
日獣大	C	女性教員の数は増えたが、比率は変わらない。女子学生の割合が高いので、今の倍くらいに早急に改善すべき。
麻布大	C	女性教員数は 11 名で過去数年横ばいである。
日 大	C	女性教員は、実習助手を含めると 5 名が配置され、教員全体の 10%以上を占めているが、獣医学教科の教員は 2 名であり、改善が必要である。

③ 教員数と学生数の比率は前回の調査と比較して改善されたか？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	多少改善されたが、以前として不十分である。
北里大	B	前回に比較して改善が認められる。さらに、現在公募中の臨床系教員が補充されることでより改善される。
日獣大	B	教員の実数は増えており、比率には改善が認められる
麻布大	C	学生数は特に変化なく、教員数は上記の①の状況である。
日 大	C	従前同様で、改善の途上にある。

II-2 臨床実習教員構成

① 臨床教員の構成は改善されたか？（教員数、専任・兼任、年齢構成、専門分野など）

大学名	評価	コメント
酪農大	C	伴侶動物に係る臨床教員には欠員が生じており、不十分な部分が多い。専門分野毎に欠員の偏りがある。全教員にしめる臨床系教員の比率も以前と変化がない。年齢構成上もより若手教員の増が必要と考えられる。
北里大	B	教員数の増加により専門分野が多岐に亘り、改善された部分が多い。しかし、未だ補充されていない欠員もある。
日獣大	C	年齢構成のアンバランスが未解消。若手の臨床教員の絶対数が不足している。
麻布大	A（臨床系） C（産業動物系）	退職者に対する新規教員採用が円滑に進み、年齢構成および専門分野も考慮された構成になっている（臨床系） 臨床教育には多くの時間が割かれ、教員の負担は大きい。そのため十分な数の教員が必要であるが、満たされていない（生産獣医学系）
日 大	B	臨床系教員の構成に関しては、前回調査時から更に進展し、専任数、専門性についてはある程度、適切な状況に改善された。なお、職位に応じた教員間の年齢構成は、臨床的専門性確保から一概に画一化はできない。産業動物学および動物行動学、エキゾチックアニマル学等の教員補充が望まれる。

②教育目的・目標に沿った臨床実習教育が出来る適切な教員構成(各科目担当の教員数・専任、兼任、年齢構成、専門分野など)になっているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	伴侶動物に係る臨床教員には欠員が生じており、不十分な部分が多い。専門分野毎に欠員の偏りがある。
北里大	C	臨床系教員に欠員があり充足されていない。また、実習にTAが参加する実習と参加しない実習がある。そのため参加しない実習では、学部専攻生が実習をサポートしている状況であり、補助教員の配置が望まれる。
日獣大	C	内科系教員に比べ外科系教員の数が少ない。
麻布大	B	各科目の担当教員の構成、および年齢や専門分野は総合的な臨床教育を実施するうえで問題ないが、教員数は不十分であり、退職者と新規教員との引き継ぎ期間が短く、臨床教育の継続性を維持するための施策が必要である。
日大	A	現在のカリキュラムを実施する上では適切な構成にある。新たなコアカリキュラムで要請される、臓器別診療科に伴う教育および実習への対応も可能である。しかし横断的授業(オムニバス形式等)実施に対するカリキュラム再建と運用に関し、方法論的検討を課題とする。

③ 臨床実習担当教員で補充したい分野について(具体的な分野を記載下さい)

大学名	コメント
酪農大	(組織改革に伴い)臨床検査学、画像診断学、伴侶動物内科学に欠員が生じており、早急な補充が必要である。
北里大	歯科
日獣大	小動物の軟部外科、大動物外科一般
麻布大	臨床系では、基本的な臨床基礎実習での内科学・外科学分野の教員補充が必要である。 産業動物系では、患畜の多くが牛であるため、牛の臨床経験が十分である教員の補充が必要である。分野としては内科、繁殖のすべてをカバーできるので、特別ということはない。
日大	産業動物内科学および外科学、動物行動学、エキゾチックアニマル学などの補充が必要である。

④ 臨床実習の目標を達成するために、臨床系教員の教育担当時間配分は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	伴侶動物医療の臨床実習については多くの教員が共同して実施しているため、担当時間が長い傾向にあり、今後ポリクリなどが本格的に実施されると実習に係る担当時間はさらに増加すると考えられる。生産動物医療の臨床実習についても搬入される症例動物を使用している実習など教員間で負担時間にバラツキが大きく、改善の余地が必要と考えられる。
北里大	C	目標達成のための時間配当は適切である部分が多いが、教員間で担当時間のバラツキがあり、改善すべき部分がある。
日獣大	B	教育担当時間配分は適正である。
麻布大	B（臨床系） C（産業動物系）	診療科によって実習内容が異なるが、教員担当時間は担当教員によって負担内容が異なり適切さに欠く。専門性もあることから負担を一律にできず負担に対する方策が必要とされる（臨床系）。 産業動物の臨床教育には多くの時間が割かれる。教員数が十分でないため教員の負担は非常に大きい（産業動物系）。
日大	C	臨床教員は増員されてきているが、教員数の増加に伴い家畜病院における診療の負担は増加した。このため教育ならびに準備に制限が生じている。教育と診療の両立を図る臨床教育計画策定の時期を迎えていて、改善が必要である。

II-3 衛生学実習教員構成

① 教育目的・目標に沿った衛生学実習教育が出来る適切な教員構成(各科目担当の教員数・専任、兼任、年齢構成、専門分野など)になっているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	当該実習科目においては、人獣共通感染症学、食品衛生学（薬剤耐性菌、食中毒を含む）、家畜衛生学（個体の家畜管理）、ハードヘルス学（家畜群の衛生管理、疾病予防）、環境衛生学および獣医疫学の各専門家が専任であたっている。年齢構成および教員数に関する問題としては、環境衛生学、家畜衛生学およびハードヘルス学で各1名の教員（准教授以下の職階が望まれる）補充が必要である。
北里大	B	獣医衛生学実習には2名の獣医衛生学専任教員が配置されているが、実習はTAと学部専攻生の協力で運営されており、補助教員の配置などが将来的には望まれる。公衆衛生実習においては、3名の専任教員が配置されており、実習はTAと学部専攻生の協力で運営されている。
日獣大	C	衛生学実習教育担当の教員がかなり不足している。実習時には非常勤講師を配置して補っているのが現状である。
麻布大	D（家畜衛生学・伝染病学実習） B（公衆衛生学実習）	「家畜衛生学実習(本学)」は4名、「家畜伝染病学実習」は2名で行っているが、そのうち2名の教授は60歳以上。他の教員も45歳以上と高齢である。つまり、若手教員が極端に不足している。このような状態では5年先の将来も暗いものである。学生の立場からはお父さん世代よりもお兄さん世代に担当をして貰いたいのが本音のようである。 「獣医公衆衛生学実習」は専任教員4名（内1名は募集中）体制で行っている。単位数に占める教員数、年齢構成等は適切である。しかしながら、獣医公衆衛生学実習の関連する分野は、食品衛生、人獣共通感染症、環境衛生などで実習項目も各分野多岐にわたっており、実習項目すべてをその専門分野の教員で行うことはできていない。
日大	C	実習に必要な若手教員および専任のスタッフが不足している。

② 衛生学実習担当教員で補充したい分野について（具体的な分野を記載下さい）

大学名	コメント
酪農大	上記のとおり、環境衛生学、家畜衛生学およびハードヘルス学で各1名、合計3名の教員補充が必要である。
北里大	実務的な分野の実習については、学外の人材（家畜保健衛生所、畜産試験場食肉衛生検査所など）の協力体制を作ることで、より実践的な実習内容が可能となると思われる。
日獣大	疫学分野。人獣共通感染症分野。
麻布大	各大学で実際の実習内容が異なるので、本学の「家畜衛生学実習（狭義）」と「家畜伝染病学実習」では、現行の実習内容に分子生物学的な疾病診断に関する実習の充実と鶏病及び飼料・飼養衛生に関する分野の補充が望まれる。 現在募集中であるが、環境衛生分野における環境分析を専門とする若手の教員が必要である。
日大	食品衛生学、環境衛生学、疫学、野生動物医学分野の教員補充が求められる。

③ 衛生学実習の目標を達成するために、担当教員の教育担当時間配分は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	退職者の補充以外では 2006 年度以降で 3 名の教員が加わり実習を担当しており、改善された部分も多い。一方、まだ教員補充の無い分野では教育担当時間は適切とは言い難い面がある。
北里大	B	本学では実習 1 単位が配当され、3 時間の実習時間で 15 回で計画されており、2 名の教員の教育負担も適切と思われる。
日獣大	C	絶対数の不足のため、個人への教育担当時間は他の科目に比べてかなり過重な状況となっている。
麻布大	C (衛生・伝染病) A (公衆衛生)	いわゆる国公立のように少人数の教育体制でないことは周知の事実である。教員一人当たりの授業時間が多いので、衛生学実習の目標を達成させるために割ける時間数は必然的に不足してしまう。つまり、大いに適切とは言えない。 「獣医公衆衛生学実習(2 単位)」および「環境毒性学実習(2 単位)」の一部で実習が行われており、担当教員の教育担当時間配分は適切である。
日大	C	教員が不足しているため、担当する全教員の教育時間配分が過剰となっている。

III 教育支援者

III-1 全体

① 教育支援者数や構成（人数や担当職務など）は改善されたか？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	教育支援者数は以前とほとんど変化がなく、特に技術職員が不足している。
北里大	B	教育支援者の増員、特に実習などを直接支援する TA が増員されたことなど、改善された部分が多いが、大学院生の在籍者数によって左右される。
日獣大	B	十分な数の教育支援者が配置されているが、配置がアンバランス。
麻布大	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本学は大学院博士前期課程の学生を TA に採用しているが、獣医学科教育への TA は一部の実習科目に限られている。 ・ 実習用動物の管理等に関しては、動物管理センター所属職員 2 名が担当している。 ・ H21 年度から附属動物病院には特任助教 I 種 4 名が採用されているが、小動物診療以外の獣医学科教育には係わらない。 ・ その他、小動物臨床部門に限るが、動物看護師、薬剤担当獣医師、及び研修獣医師なども、学生の臨床実習を支援している。
日 大	B	ティーチングアシスタントおよび病院の研修医が増員され、以前より改善はされているが、学生数を考慮すると不十分であり、更なる増員が望まれる。

② 教育支援者と学生数の比率は改善されたか？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	教育支援者数は以前とほとんど変化がなく、特に技術職員が不足している。
北里大	B	教育支援者の増員により、学生数との比率は、改善された部分が多い。
日獣大	A	数からみた比率は改善されている。
麻布大	C	特に変化なし。
日 大	B	病院の研修医や支援獣医師が増員され、教育支援者と学生の比率は改善されている。しかし、病院を利用した臨床実習以外の学科では TA の人数は不十分である。

III-2 臨床実習教育支援者

① 臨床実習教育が充分出来るような適切な教育支援者数や構成になっているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	研修医が齊一科目実習や専修科目実習の教育支援に当たっているが、技術系の専任職員はおらず、非常に不十分な状況である。
北里大	C	TA が配置されていない実習においては十分な支援が得られず、教育支援者数を増員する必要がある。
日獣大	B	実習補助として病院助手を5名配置している。
麻布大	B(臨床系) C(産業獣医系)	臨床系では、一教員に対する負担が重く、この負担をサポートする教育支援者体制が無い(臨床系)。産業動物の臨床教育を実施するにあたり、臨床系の研究室に所属する学生に依存する部分が多い。ティーチングアシスタントなどの確保が必要である(産業動物系)
日大	B	ほぼ適切な構成となっている。外部講師、TA を含む教育支援者の計画的な増員により、臨床実習教育の支援体制人員は員数、構成ともに充実している。しかし近い将来診療科を増加する上で、更なる増員ならびに人員構成の充実を継続的に進めなければならない。

② 病院の支援要員は臨床実習教育に適切に関与しているか。

大学名	評価	コメント
酪農大	C	技術系の支援要員(薬剤師、放射線技師)などは病院業務支援者であり、教育支援にはほとんど担当していない。研修医は適切に関与している部分が多いが、科目によってバラツキが大きい。
北里大	B	病院の支援要員は、病院で実施される臨床実習には適切に関与している部分が多い。
日獣大	C	教員、病院助手との連携が十分ではない。
麻布大	B	診療環境に対する事務、看護師への配慮はなされているが、診察実習中の支援体制がない。臨床実習を行う教員の肉体的・精神的負担は大きい。入院家畜の管理などは適切に遂行している。
日大	A	適切である。有給研修医の増員に加え、非常勤講師、勤務獣医師の確保により病院を使用したローテーション実習は適切に実施できている。

③ 病院の支援要員が臨床実習に関わっている場合、その教育支援は適切に評価されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	D	教育支援についてはほとんど評価されていない。教育病院として今後体制を整備する事が必要である。
北里大	C	教育支援者に対する授業評価などは実施されておらず、改善すべき点が多い。
日獣大	B	評価システムは整備してあるが、十分に機能していない。専任教員と支援者との役割分担が不明確である。
麻布大	B	臨床実習に関わる支援要員が明確化されていないために、評価ができない。 教員は支援要員の貢献度を高く評価しているが、待遇面に関しては不明である。
日大	C	改善の余地を残す。臨床教育支援者として、研修獣医師として一定の評価を与えているものの、教育支援に対する評価を個別には行っていない。現状では支援獣医師や研修医にとって臨床実習は業務に含まれていないので臨床実習に携わることを明記する必要がある。また、支援獣医師に対しても臨床実習に携わった場合の手当を考慮すべきである。

III-3 衛生学実習教育支援者

① 衛生学実習教育が充分出来るような適切な教育支援者数や構成になっているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	衛生学実習教育を担当する教員のうち、定員に満たない員数については大学の予算で学外の講師を招聘出来るが、教育体制として鑑みた場合、それのみでは十分とは言い難い。
北里大	C	教員に加え、教育支援者はT A 1名と学部専攻生がさらにそれをサポートする体制となって実習が運営されている。学部専攻生は準備と後片付けなどの補助が主体であり、教育支援ができるT Aの数を増やす必要がある。
日獣大	C	実習用に非常勤講師を確保し、何とかやりくりしている状態であり、十分ではない。
麻布大	C	本学にはティーチングアシスタント制度があるが、その担い手は大学院生である。獣医学専攻の院生が少ないような状況にあり、この制度を活用できる実習科目は限られており、別途実習教育支援者の確保策の検討が必要である。 現状の実習教育体制では、教員への負担は計り知れないものがある。また、支援者は固定できないため、年度毎に支援者の教育に時間を要するため効率的ではなく、充分とは言い難い。
日大	C	ティーチングアシスタント制度の導入により、教育支援者数が改善されているが、専任教員または専任スタッフの増員が不可欠である。

IV 教育課程・教育方法

IV-1 全体

① カリキュラム全体で臨床実習と衛生学実習の時間数や割合は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	カリキュラム全体としてはほぼバランスがとれた時間数や割合となっている。
北里大	C	口蹄疫対策など社会要請を考慮すると衛生学実習は不十分であり、改善されていない部分が多い。
日獣大	B	時間数、割合は適切に設定されている。
麻布大	B	必ずしも十分な時間数とはいえないが、学生を多くの班に分けて細かく指導できるようにするなど、現有教員数でできる限りの努力をしている。
日大	C	時間数および割合はともに不足し、十分な状況とはいいがたい。学生数を考慮すれば臨床実習を適切に実施できる時間数の不足と実習場所の不足、狭小性および関連諸施設の充実が喫緊の課題のひとつである。また衛生学実習では、実習項目や時間数、割合とも不足しているため改善が必要である。

IV-2 臨床実習

IV-2-1 臨床実習

① 臨床実習の各科目の達成目標が適切に設定されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	それぞれの実習について達成目標がシラバスに記載されており、概ね適切に設定されている。
北里大	B	各科目の到達目標はシラバスに記載されており、適切な部分が多い。
日獣大	B	達成目標は適切に設定されている。
麻布大	A	本学では卒業後の進路として臨床獣医師を目指す学生が多く、必要とされる基本的知識や技術の習得を目標としているため、臨床実習に際して、基本的実習内容を設けることで、達成目標を明らかにしている。そのため、おおよその臨床実習は段階的に行われるカリキュラムを採用している。
日大	B	ほぼ適切であるも、大動物臨床に関する内容と担当教員の充実が必要である。

② 臨床実習の目標を達成するために、科目および単位の編成は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	実習科目と単位は適切に編成されている。
北里大	B	目標を達成させるために、内科や外科などの縦割りの実習だけでなく、横断的な臓器別の実習を行うように科目や単位が構成されており、適切な部分が多い。
日獣大	B	科目、単位は適切に編成されている。
麻布大	B	おおかたの科目および単位の編成は適切と判断できるが、病院実習に関して実習時期の履修者に適切さを欠く場合もある。
日大	B	ほぼ適切であるが、学生数を考慮すると、担当教員数や設備、施設のさらなる改善が求められる。

③ 臨床実習の目標を達成するための実習内容になっているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	概ね適切な実習内容になっている。
北里大	B	小動物と大動物のバランスを考慮し、さらに横断的な臓器別の実習などを取り入れたことで、目標達成のための実習内容になっている部分が多い。
日獣大	B	実習内容は目標を達成するために必要な内容、項目が設定されている。
麻布大	A	おおかた目標は達成している。
日大	B	現時点では、現状における最善を尽くし、概ね対応している。

④ 講義と実習は適切に開講づけられているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	概ね適切に関連付けられている
北里大	B	講義と実習は、関連するように開講されているが、講義の進行度合いと必ずしも実習内容とが歩調の合わない箇所もある。
日獣大	A	基本コンセプトとして、講義の後、実習を実施するカリキュラムとなっている。
麻布大	A	実習前に先行して講義が行われ、おおかた適切に開講している。
日大	B	ほぼ適切に開講づけられている。今後は臨床実習をより早期もしくは低学年より開始し、参加型実習の実施と拡充をする意見もある。

⑤ 臨床実習のための予算・施設・設備は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	実習室、設備などは概ね整備されているが、動物病院と獣医学科の実習室が離れているため教員、学生の移動などに若干の問題がある。貴重な症例について学用患畜として受け入れる経費は設定されておらず、生産動物については所有者からの委託（寄付、所有者変更）などで受け入れている。
北里大	B	平成 20 年に小動物診療センター、平成 21 年に臨床教育・研究支援小動物飼育施設が完成し、施設・整備の充実は図られたが、学部からの動物購入・飼育管理のための予算では不十分であり、不足分は関連する研究室が補充している状況である。
日獣大	A	実習のための病院施設が手狭である（学生実習のためのスペースが特に確保されているわけではない）。 実習を実施するための予算、設備は十分に配分、整備されている。
麻布大	B	個々の学生にできるだけ体験させる実習に心がけているため、器具、機器の摩耗が顕著で、永続的な予算化が必要である。
日大	C	予算、施設、設備のさらなる充実が必要である。

⑥ 臨床実習の実施単位、人数、班編成は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	概ね適切な実施単位であるが、斉一実習について更なる少人数編成に改善することが必要である。
北里大	C	小動物病院実習での小グループ（2～3名）によるローテーション以外は、施設・設備および実習動物との関係で1班10～20名編成である。そのため、実習時間を十分に取るなどの配慮をしているが、教育目標を達成させるためには改善すべき部分が多い。
日獣大	C	1班10人程度の班編成となり、やや多い。将来的には5～7人編成にしたい。
麻布大	B	実施単位について、おおかた適切であるが、積雪な教員支援者がいないために、多人数の班編成になりやすい。
日大	B	ほぼ適切である。しかし学生アンケートでは、1班ごとの学生数を減らした実習の要望が多い。したがって、実習での1グループの学生数をさらに少なくし、担当教員数の増加を考慮しきめ細かな実習を心がける必要がある。

⑦ 臨床実習のために使用する動物の種類・数は教育目標を達成するために適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	生産動物についてはほぼ適切な症例ならびに使用動物が確保されている。 伴侶動物については症例以外の実習動物は自家繁殖しているが、生体以外の手法などを今後より多く使用していくことが必要と思われる。
北里大	C	実習に使用できる動物種や頭数は限られており、教育目標を達成させるためには、改善する部分が多い。
日獣大	B	100%満足できる数ではないが、実習の教育目標達成には十分と考える。
麻布大	A	最小限で、最大の教育目標を達成するように配慮している。
日大	C	現在、臨床実習に使用可能な動物の種類・数には制約が有り、臨床教育実施に必ずしも十分でない状況であり、改善が必要である。

⑧ 臨床実習で使用する動物についての動物福祉・獣医倫理的教育は適切に行われているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	実習動物について動物福祉・獣医倫理的教育は概ね適切に実施されている。生産動物の症例については病理的な診断の際により一層の説明が今後求められると思われる。
北里大	B	獣医倫理学・動物福祉学および実験動物学において、適切な教育を実施している。
日獣大	B	初年度から多くの講義（獣医学概論、獣医倫理学など）の中で繰り返し行われており、動物福祉、倫理教育は適切に行われている。
麻布大	A	最大限の配慮に努めている。
日大	B	ほぼ適切に行っている。本学では同上科目を、一年次後期に配置し哲学者、医師、獣医師、臨床系教員による生命倫理・動物福祉の徹底的な初期概念形成を積極的に行っている。また臨床実習全般を通じ、動物倫理教育を行っている。動物に触れない臨床実習は教育効果がなく、かえって動物倫理を深く考える機会も失う。さらに改善の余地はあると思われるが、現時点では適切に実施されていると評価される。

⑨ 学外での臨床実習は適切に実施され、評価されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	単位認定は実習先の責任者からの成績評価票と学生からのレポートから評価され、適切に評価されている。
北里大	B	学外実習として実施されている臨床実習（主に見学実習）では、学生からレポートを提出させ、依頼先からも評価をもらっている。
日獣大	B	担当教員と学外講師との間で密接に関連が取れており、適切である。
麻布大		小動物では学外実習をしていない。
日大	B	ほぼ適切に実施、評価している。小動物に関しては学外の個人動物病院において、産業動物に関しては主として NOSAI の夏期臨床実習生受入れ可能家畜診療所において学外実習を行い、実習機関での実習内容をレポートし、学内発表会での発表を評価している。

⑩ 学外での臨床実習が実施されている場合、その支援体制は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	NOSAI や都道府県などでの実習については事務部が窓口となり、スムーズに支援されている。また、個々の教員からの募集連絡も問題なく行なわれている。伴侶動物病院における実習は原則的には学生個々が実習先を探す事にしており、特別の支援体制はとっていない。
北里大	C	学外実習先を探す際などの補助を行う支援組織はあるが、全てを網羅しているわけではなく、適切な対応を検討する必要がある。
日獣大	B	100%ではないが、これまで大きな問題はなく適切な支援体制といえる。
麻布大		小動物では学外実習をしていない。
日大	C	各実習受け入れ先に教員は同行せず、付託しているのが現状であり、支援体制および教育指導の強化が求められる。

⑪ 海外での臨床実習が実施されている場合、内容や成果について適切に評価されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	実習内容については同行教員が確認・支援を行っており、帰国後、発表会またはレポート提出などを実施しており、適切に評価されている。
北里大	B	実習内容の報告書の作成および発表会を実施している。また、実習には教員が同行することで、学生が行った実習内容を観察しており、その成果や内容を適切に評価している。
日獣大	C	参加した学生のレポート報告のみで教員は実習内容を知る。引率教員の实習内容に関する報告を学科で詳細に討論する機会はあまりなく、従来のカリキュラムを踏襲するにとどまり、マンネリ化しているきらいがある。内容・成果が十分に評価されているとは言えない。
麻布大		海外での臨床実習を認めていない。
日大	A	適切に行っている。夏期休暇中、4～6年生の希望者を対象に、アメリカ・ワシントン州立大学で約2週間の臨床実習を実施している。20～40名の参加学生は小動物コース、大動物コースに分かれ、内科学、外科学、臨床繁殖学、麻酔学、画像診断学、エキゾチックアニマル学などで、1～2時間の講義を受けた後、2～3時間のウェットラボを行っている。参加した学生は実習後に各実習内容に対しレポートによる評価を受けている。

⑫ 海外での臨床実習が実施されている場合、その支援体制は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	OSU ならびにハノーバー獣医科大学における臨床実習は学部で希望者の選考を行い、日程調整を先方と行い、教員が同行して実習を支援している。事務手続きについては事務部が支援しているが、必ずしも十分とはいえない。
北里大	B	米国3大学の夏期研修では、1年前から英会話を必修とし、教員が研修の支援を行っている。中国の吉林大学で中獣医の講義と実習を受講しており、教員がその実習を支援している。
日獣大	C	引率教員の旅費の負担を行っているが、相手先が用意する実習内容をそのまま受けている状態で、こちらで希望する内容を実習に取り入れてもらうことはあまりない。新たな実習内容を加えるためには経済的負担が増えることになるので、その面で支援が十分とは言えない。
麻布大		海外での臨床実習を認めていない。
日大	A	海外での臨床実習には教員が引率し、コースごとに講義の通訳ならびにウェットラボの通訳や内容捕捉を行い、学生の理解・習熟度に合わせた支援を行っている。また実習終了時には現地で英語での試験が行われ、ワシントン州立大学との単位互換制度により、合格した学生は日本大学における演習の単位が取得できる。

IV—2—2 臨床実習教育における動物病院の位置づけ

① 臨床実習教育環境として、動物病院は整備され、かつ有効に活用されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	施設・設備面ではほぼ適切に整備されている。症例を使用する環境もほぼ適切である。専修教育の場としても動物病院としては学生専用のセミナー室などの面積がス即している。
北里大	A	動物病院でのローテーション実習に合わせて、動物病院の新築を行い十分な広さと設備を充実させることができ、大いに活用されている。
日獣大	C	学生数に比して病院面積が狭い。実習施設は一通り整備されているが、新規の機器について学生各自が自由に使える数は整っているわけではない。この点が十分ではない。
麻布大	A	適切に活用されている。
日大	B	ほぼ適切である。教育動物病院の診療室は12室、診療科は6つの臨床系研究室を主体とした6診療科で、学生はローテーションすることで様々な症例に接することができる。また高度獣医療を推進するための各種機器も整備されていて、各診療科ごとのカンファレンスルームも複数整備されている。しかし、学生一人当たりの面積は少ないため更なる拡充が必要である。

② 学用患畜は臨床実習に適切に活用されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	学用患畜という扱いではないが、症例は臨床実習の対象として活用されている。
北里大	B	大動物関連の実習においては、十分な学用患畜数が確保されており有効活用されている。しかし、小動物の学用患畜数は少なく、十分に活用されているとは言い難い。
日獣大	C	見学実習のみで活用。十分に活用されているとは言えない。
麻布大	A	適切に活用されている。
日大	C	学用患畜の数が制限されていて、臨床実習としての活用は不十分である。

③ 現在、参加型臨床実習が実施されている場合、その内容、教員の指導体制は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	専修教育として農場の動物や教員の往診随行、動物病院症例における実習参加についてはある程度教員の指導体制が確立している。斉一教育としての実習については大学としての指針や指導体制について現在検討を進めている。
北里大	D	実施されておらず、現在ガイドライン作成の検討中である。
日獣大	D	現在、参加型実習はほとんど行っていない。内容は検討中で新しいカリキュラムに組み入れる予定。したがって現時点では評価できない。
麻布大	B	おおかた指導体制は適切である。しかし診療科によっては適切な実習教育要員の手立てが必要である。
日大	B	実施していない。参加型実習を見据えて、現在のローテーション実習は行われているが、現行の体制では教員数の不足があり改善すべき点が多い。

④ 参加型臨床実習が実施されている場合、管理体制は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	専修教育では教員が少人数の学生を十分に管理する体制となっている。斉一教育については管理体制は現在検討中である。
北里大	D	実施されておらず、現在ガイドライン作成の検討中である。
日獣大	D	ほとんど行っておらず、評価できない。
麻布大	A	診療科により適切な実習教員要員が必要であるが、おおかた系会議はもとより、病院内小動物部門会議ならびに病院運営会議の議を経て、適切な管理体制が得られている。
日大	A	現在の実習は見学型実習であるため学生の事故等に関する問題は生じていない。ただし、保定等の際に事故が生じないように細心の注意は払っている。

IV-3 衛生学実習

① 衛生学実習の各科目の達成目標が適切に設定されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	適切であり、シラバスに明記し、学生に周知している。
北里大	B	本学には予防衛生系科目が、感染症学、人獣共通感染症学、公衆衛生学、疫学、魚病学、獣医関連法規、寄生虫学、微生物学などが開講され、実習も同時に実施されており、獣医衛生学実習はこれらの実習との棲み分けもされている。
日獣大	A	公衆衛生学、衛生学ともに達成目標は適切に設定されている。
麻布大	A(衛生学・伝染病学実習) B(公衆衛生学実習)	既述のように本学では、「家畜衛生学実習(広義)」は「家畜衛生学実習」と「家畜伝染病学実習」の2科目で構成されている。それぞれが、疾病診断、防疫、疫学的なアプローチ技能などの内容で実習スケジュールが設定されている。 「獣医公衆衛生学実習」は幅広い分野を十分にカバーできていないものの、毎年作成されるシラバスで達成目標を掲げており、できる範囲で達成目標はおおむね適切に設定されている。
日大	A	各科目ともシラバスに達成目標が設定されている。

② 衛生学実習の目標を達成するために、科目および単位が適切に編成されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	適切である。
北里大	B	科目内容と単位数は適切に編成されているが、配当学年が4年生であることについては、さらに検討が必要かも知れない。
日獣大	A	目標達成のため、科目、単位は適切に編成されている。
麻布大	A(衛生学・伝染病学実習) B(公衆衛生学実習)	「家畜伝染病学実習」は4年次1単位必修および「家畜衛生学実習」は4年次1単位必修で編成されている。前者は伝染病の診断のための技術、現場での対応できる実践技術の習得を、また、後者は家畜の生産性を向上させるための家畜環境・畜舎環境の測定法とコントロールの考え方および実践的な疾病予防の技術や考え方を習得を目標とした内容で編成されている。 獣医公衆衛生学実習には非常に幅広い分野の多岐にわたる項目があり、目標を達成するための科目および単位が不足しているところもある。
日大	B	II-3②で提示した分野を除いて、科目および単位は概ね適切に編成されている。

③ 衛生学実習の目標を達成するための実習内容になっているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	シラバス作成の際に最も留意している点であり、実習目標を達成するための授業内容になっている。
北里大	B	予防衛生系の他の実習科目との整合性も取りながら、棲み分け的な内容と衛生学独自の内容で構成されているが、より実践的な演習項目についてはさらに検討が必要と考えている。
日獣大	B	目標達成のためには十分な実習内容となっているが、一部不足。
麻布大	A(家畜衛生学・電家畜伝染病学実習) B(公衆衛生学実習)	「家畜伝染病学実習」は牛、豚、鶏の感染症の診断、狂犬病の診断、感染症の病理検査法から構成されている。一方、「家畜衛生学実習」は気候と空気の検査、上水道の仕組みと飲料水の検査、畜産環境の保全と検査、土壌の性質と検査、消毒と疾病予防、疫学を考えた統計手法、搾乳管理および学外の施設見学から構成されている。 「家畜公衆衛生学実習」は、シラバスに掲げた目標を概ね達成するための実習内容となっているものの、実習時間（単位数）とその専門分野の教員の不足のため多岐にわたる項目をすべてカバーできる内容とはなっておらず、適宜改善が必要である。
日大	B	各科目における目標達成に必要な実習内容となっている。

④ 講義と実習は適切に関連づけられているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	講義と実習は概ね開講時期が連続する、あるいは同時期となるよう、設定している。
北里大	B	獣医衛生学実習の目的達成のために、獣医衛生学は前期 1 単位、後期 1 単位が配当され、講義内容と実習が出来る限りマッチする形で組み立てられているが、実習は前期で終了するので、限界はある。
日獣大	B	基本は講義後、実習が行われるカリキュラムで、関連付けは十分できている。
麻布大	B	講義担当教員と実習担当教員は重複することが多く、講義で不足する部分を実習で、実習で不足する部分を講義でと言った状態での相互補完も可能である。実習項目は関連分野の講義が終了した後に行うようにしているが、公衆衛生学実習は講義および実習は同一学年（4年）で開講されているため、最初に行う実習項目には、講義の前に行っているものもある。学年配当を変える等の工夫が必要である。
日大	A	すべての実習は、必須科目であり、各科目の講義と実習がセットで組み立てられ、しかも講義終了後に実習が開講され、適切に連携されている。

⑤ 衛生学実習のための施設・設備は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	今年度より、従前の 3 実習室のほかに、新たに火炎滅菌による無菌的操作を実施可能な実習室を 1 室加えた。
北里大	C	実習内容によっては、微生物系の P2 実習室も必要であり、実験台の配置数などの施設設備の面では、今後検討を要する。
日獣大	B	施設、設備は実習の実施には十分である。一部の機器（シーケンサなどの遺伝子解析のための先端機器など）の数が不十分である。
麻布大	C	「家畜伝染病学実習」と「家畜衛生学実習」の実習室は同一で、担当教員が所属する研究室と同じ建物（獣医学部棟）内であることから施設設備等の共用、有効活用ができる。実習室は整備されており、部屋の空調、実験台の配置、オーディオ設備など実習施設としては充分で自慢出来るものがある。しかし一般社会等で使用されている進歩著しい高度な機器分析等の実習を行うための設備は不十分である。
日大	D	衛生学分野の実習では、他の学科目の実習室と共用している。特に病原微生物を安全に取り扱う実習室が未整備のため、学生に適切ナリスク管理が十分確保されていないので、早急な対応が必要である。

⑥ 衛生学実習の実施単位、人数、班編成は適切か。

大学名	評価	コメント
酪農大	C	科目によるが、現在の 1 班あたり 7～8 名構成から 4～5 名構成に出来るように、1 学年の学生数に対する設備等との関連から実現は極めて困難である。
北里大	C	学生の班編成が 10 名単位と、数が多いので、実験台などの整備を行い、8 名或いは 6 名単位の班構成となるようにできればと考えている。
日獣大	C	もう少し少ない人数の班編成にしたい。
麻布大	A(家畜衛生学・家畜伝染病学実習) ・) B(公衆衛生学実習)	「家畜伝染病学実習」および「家畜衛生学実習」とも単位数は 1 単位で、両実習ともに時間割では 14:00～16:50 となっているものの、実際は 18:00 かそれ以降に延びる場合も多々ある。1 学年 160 名程度を半分にし、教員は同じ内容の実習を 2 回実施している。少人数の参加型実習を行っているため、班編成は 80 名を 16 班に分割しているため、少数(4～5 名)で各班を編成している。このため担当教員にとってはかなり過重労働な部分もあり、教育効果の面からも実習補助者配置が切に望まれる。 「家畜公衆衛生学実習」では、実施単位、人数、班編成については、学生数と担当教員数との関連が多いため、今後は実施方法等について改善する余地がある。
日大	C	各衛生学関連実習科目については、1 班あたりの学生数は 6 名程度であり、前半および後半（各 70 名程度）に分けて実施している。現在のカリキュラムおよび担当教員の配置体制では、この方法を取らざるを得ず、全体的なカリキュラムの見直しが必要である。

⑦ 学外での衛生学実習は適切に実施され、評価されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	家畜衛生、公衆衛生およびそれら関連研究施設を利用した北海道庁主催の「保健所研修」を行っており、参加学生的好评を博している。受け入れ機関も人員確保の一環として期待している。
北里大	D	学外での衛生実習は、家畜保健衛生所等で学外実習を行う学生のみであり、適切に実施されているとは言えない。人数的な問題があり、学外での実習が困難となっているが、昨年、青森県が大学の学外実習にもサポートする体制を整えてくれており、バスを利用した見学実習を企画したが、今年度は口蹄疫の発生により中止となった。
日獣大	C	レポートのみの報告で、内容の評価が十分とは言えない。
麻布大	A	学外での実習、つまり見学が主なものであるが、2回実施している。1回は全日実習で食肉センター、畜産研究所、飲料工場、公共下水終末処理施設へ、あとの1回は半日で清掃工場、浄水場も見学を実施している。他に、近隣の河川に出掛け、環境調査と採水を行い、汚水の検査を行っている。 学生に現場を見学させることで高学年での専門学外実習先の選択の参考にさせている。また、将来の就職先の可能性もあり仕事内容を把握させる機会の一部として評価されている。
日大	B	現在、獣医衛生学実習では「動物検疫所」、獣医公衆衛生実習では「食肉衛生検査所」および「動物愛護センター」における学外実習が実施されている。実習後はレポートあるいは試験によって学習効果が評価されている。

⑧ 学外での衛生学実習が実施されている場合、その支援体制は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	家畜衛生、公衆衛生およびそれら関連研究施設を利用した北海道庁主催の「保健所研修」を行っており、学生受け入れ機関の対応も良好である。
北里大	D	青森県の支援により、現在、学外での実習体制を整えつつある。
日獣大	C	経費（主に交通費）は学生負担で、支援が十分とはいえない。
麻布大	A(衛生学・伝染病学) B(公衆衛生学実習)	全日の実習では他の科目担当者に依頼して、時間割調整をお願いしているが、全ての教員が快く対応してくれている。各施設への公文の手配は事務担当者が、見学に要する費用(バス代)はすべて実習費で賄っている。 見学に要する貸し切りバス代等は、大学側から実習経費とは別途に支援があり、経費の面での支援体制は適切である(公衆衛生学実習)。
日大	B	現在、衛生学関連の学外実習は、公的機関で実施されているため、先方の無償支援・協力に依存している。班編制人数が少なければより充実した実習が可能であるが、現実的には見学実習にとどまっている。

⑨ 海外での衛生学実習が実施されている場合、内容や成果について適切に評価されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	なし	以前、東フィリピン大学で熱帯獣医学についての海外実習を実施していたが、現在は中断しており実施されていない。
北里大	D	米国 3 大学の夏期研修で大動物診療での農家の巡回などで、少人数の学生が海外での予防衛生実習を経験しているのみであり、内容や成果について評価をする以前の段階である。
日獣大	C	十分とは言えない。
麻布大		該当なし
日 大		実施されていない

⑩ 海外での衛生学実習が実施されている場合、その支援体制は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	なし	特になし
北里大	D	海外で衛生学実習を実施することを考えた場合、特に、隣国の韓国などの口蹄疫、鳥インフルエンザなどの海外悪性伝染病対策として、机上訓練などが可能かもしれないが、現時点は、国際交流の交渉段階である。
日獣大	C	引率教員の交通費のみの支援で、十分とは言えない。
麻布大		該当なし
日 大		実施されていない

IV-4 教育方法

IV-4-1 臨床実習

① 臨床実習の教育方針・目的は実習内容・教育方法（少人数教育、実践教育など）に適切に反映されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	方針・目的は実習内容に反映されており、実践教育についてもほぼ適切に実施されているが、教員数ならびに研修医など教育支援体制について調整が不十分で、教員負担が大きくなっている。
北里大	C	教育方針・目的は、実習内容には反映されているが、少人数教育や実践教育など教育方法には十分に反映されておらず、改善への取り組みを検討する必要がある。
日獣大	C	方針・目的はしっかり設定されているが、施設面（スペースが狭い）で適切に反映できていない
麻布大	B	教員の負担増で、小人数、実践教育に向けた教育方針を立てている。
日大	B	各科目の十分な修得には、更なる少人数教育が可能なように教員数、支援者数および設備を改善が不可欠である。

② シラバスが作成され、適切に活用されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	シラバスは実習科目ごとに作成され、適切に活用されている。
北里大	B	シラバスは実習毎に作成されており、概ねシラバスに準じて実習が実施されている。
日獣大	B	シラバスは立派なものができるが、科目によっては活用が十分ではない。
麻布大	B	生体実習のために予期しないスケジュールの変更があるが、おおかた適切な活用がなされている。
日大	A	シラバスは毎年検証、確認し、実情に沿った形で更新したものを学生に配布していて、適切に活用されている。

③ 臨床実習の方法が適切に工夫されているか？（例：ケーススタディ、ディベート、フィールドワークなど）

大学名	評価	コメント
酪農大	B	症例を使用した臨床実習とフィールドワーク（教員への往診随行）など実施方法については適切に工夫されている。斉一教育については学生と教員+教育支援者数の比率が大きいため工夫はなされているが、十分な状態とはいえない。
北里大	C	ケーススタディやフィールドワークを取り入れている実習もあるが、学生数などの関係で全ての実習でケーススタディ、フィールドワーク、ディベートを取り入れるのは難しい状況である。
日獣大	C	形は整いつつあるが、十分でない。工夫の余地あり。
麻布大	A	各担当教員は自分の症例を供して実習を行っているため、適切に運用されている。
日大	B	診療時間外を利用してケーススタディーを行っているため、時間に制限があり、教員を増員し改善する必要がある。

④ 臨床実習の達成度評価、成績評価は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	科目ごとに達成度の基準は異なるが、レポートと定期試験で成績評価はほぼ適切に実施されている。
北里大	B	実習毎に実習内容に関するレポートの提出を行い、学期末には試験を実施して出席状況などと合わせて適切な評価を行っている。
日獣大	B	理想とは若干異なるが、現状では適切になされていると考える。
麻布大	B	細部にわたる評価は個々の担当教員に委ねている。
日大	B	現時点では、現行の評価法が適切である。

⑤ 臨床実習のためのFD等の取り組みは適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	全学部的なFDの取り組みの一環として実施され、臨床実習のためには行っていないが、ほぼ適切に実施されている。
北里大	C	科目により臨床系教員全員による打ち合わせを行い、実習内容の確認や実施方法の理解を深めているが、臨床実習のためのFDは行っておらず今後の課題である。
日獣大	C	教員評価システムの整備など進めているが、FDは現状では十分でない。
麻布大	B	今後の問題である。
日大	B	臨床実習に限定したFDは行われていないが、実習目的が明確であり、それを教員間で共有しているので、概ね適切である。FDという形態で実施する必要も考えられる。

⑥ 参加型臨床実習の実施体制は適切に整備されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	C	実習内容ごとに現在では実施体制がかなり異なっており、現在検討中のことも含めてこれから整備予定である。
北里大	C	現在、ガイドライン作成の検討中であり、実施体制は十分に整備されていない。
日獣大	C	新校舎の建設も含めて計画は立てているが、現状では十分でない。
麻布大	A	系会議はもとより、病院内小動物部門会議ならびに病院運営会議の議を経て、適切な管理体制が得られている。
日 大	C	参加型実習の体制は現在検討中であり、内容を本学に適したものとし、ガイドラインを含めて討議する必要がある。設備や施設の拡充と教員の増加が必要である。

IV-4-2 衛生学実習

① 衛生学実習の教育方針・目的は実習内容・教育方法（少人数教育、実践教育など）に適切に反映されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	学生あたりの教員数の不足の問題がある。さらには、国家試験以外では活用されない実習項目を削除できず、卒業後の実践的知識導入の時間が若干、不足ぎみである。
北里大	C	教育方針と目的は実習内容には反映されているが、教育方法としての少人数教育と実践教育は十分とは言えない。
日獣大	C	実習スペースの狭さなどハード面から適切に反映されているとは言えない。
麻布大	A（衛生学・伝染病学実習） B（公衆衛生学実習）	学生全員の参加型実習を基本とした少人数の班編成により実施しているので、学生全てに実践教育(実習)が可能である。このことから学生は、授業内容のすべてにおいて実際に体得することなどから、充実感のある実習教育に繋がるものと思われる。 「家畜公衆衛生学実習」では、実習内容や教育方法については他大学からの情報や学生の授業評価等を受け、各教員が工夫を重ねながら行っている。現在のところ教育方針・目的はおおむね反映されているが、少人数教育、実践教育などは行っていないため、今後の課題である。
日大	B	衛生学実習の少人数教育は行われていないが、教育方針・目的はそれぞれの科目実施前のガイダンスにおいて周知するとともに、実践教育において適切に反映されている。少人数教育については、4年次から所属する研究室において所属教員から適切に指導されている。

② シラバスが作成され、適切に活用されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	各科目のシラバスが公開されており、実施内容・評価基準が明確に示されている。
北里大	B	シラバスは作成されており、それに従って適切に実施されているので、十分に活用されている。
日獣大	A	シラバスは良くできており、活用も十分になされている。
麻布大	A	毎年、各担当教員がシラバスを作成し学生・教員に配布している。実習はそれに従って行っていることからおおむね活用されている。また、実習項目や実施日時を実習期間中は実習室に掲示しており、学生への周知を徹底している。
日大	A	毎年の見直し、改善・確認が行われて適切に活用されている。

③ 衛生学実習の方法が適切に工夫されているか？（例：ケーススタディ、ディベート、フィールドワークなど）

大学名	評価	コメント
酪農大	A	ディベート形式は取り入れていないが、ケーススタディー、フィールド調査など、目的に応じたスタイルを取りれた実習を行っている。
北里大	C	学生数と班構成の問題でもあるが、特にケーススタディ、ディベート、フィールドワークについては、実施が難しい問題を抱えている。しかし、ベンチワークについては、各自が実習に参加するような内容となっており、他の学生の手技を見学して終わりという形にはならないように特に注意を払っている。
日獣大	B	実習内容の報告会など実施し、内容の理解が高まるよう工夫している。
麻布大	A（衛生学・伝染病学実習） C（公衆衛生学実習）	「家畜衛生学実習」において、「汚水の検査」の実習では、学外へ出掛け、近辺の環境調査、河川の水採取を行っている。実習室だけでは体験不能な部分と思われる。「空気の検査」では、学内の動物飼育エリアなどの個々の班が出向き、サンプリングや分析を行なっている。このようなフィールドワーク形式の実習も可能な限り実践に即した形式で実施している。 「家畜公衆衛生学実習」では、ケーススタディを実習の一部で行っているのみであるため、今後の検討課題である。
日大	B	ケーススタディ、ディベート、フィールドワークなどは、5年次に開講されている必修の演習科目で、国及び、地方自治体のインターンシップ、農業共済組合診療所での産業動物臨床実習などを活用している。希望者は1～2週間程度実習が可能である。

④ 衛生学実習の達成度評価、成績評価は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	概ね適切である。
北里大	B	学生の衛生学実習に対する達成度と成績評価は適切に実施されている。毎回の実習にはレポート課題があり、レポートでの内容の理解とその分析、最後に試験も実施し、その二つで出席を前提として成績評価を実施している。
日獣大	B	ペーパー試験だけでなく、実地試験など課しており適切に判断出来ている
麻布大	A	毎回の実習終了時のチェックに、各班に簡単な質問を与え、回答させるようにしている。また、実習内容については個々にレポートの成・提出により達成度の把握を行っている。成績評価は出席状況、レポート提出および実習内容の理解度・習得の程度を把握するためのペーパー試験を実施し、総合的に判定している。また、成績評価とともに前・後期の実習最終日に学生から授業評価を受けており、その内容から学生の実習目的への理解度なども参考に達成度評価を行っている
日大	A	実習実施後は、レポート提出、確認試験の実施により、適切に成績評価がなされている。

⑤ 衛生学実習のためのFD等の取り組みは適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	科目終了時に学生に対して授業評価のアンケートを行い、改善に取り組んでいる。
北里大	C	学外の関係機関との協議を含め、教員が実践の場から学ぶことが多い。しかし、十分に交流を図っておるとは言えず、今後の課題である。
日獣大	B	臨床実習と組み合わせるなどカリキュラムを工夫し、理解度を高めている
麻布大	A(衛生学・伝染病学実習) C(公衆衛生)	実習内容を向上させるために、新しいビデオ教材や情報の収集に努めている。また、必要に応じて学外での講演会などの情報も学生に紹介するようにしている。 大学全体ではFDに取り組んでいるが、公衆衛生学実習のためのFD等の取り組みは行っていない。
日大	D	獣医学教育全般に関するFD活動は開始されたが、衛生学実習のための特別のFD活動は実施されていない。

V 学生への実習支援体制について

① 学生への実習支援体制は適切か？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	実習実施のための学生のロッカーなど設備などは概ね適切である。人的支援体制については不十分なところが大きい。
北里大	C	学外実習に対する支援組織はあるが、その他の実習に対する実習支援体制は適切に整備されていない。
日獣大	B	施設・設備も充実、非常勤講師配置など現状ではかなりの支援を行っている
麻布大	A	更衣室、ロッカー、長靴置き場、シャワー室等が設置されており、学生の支度を整える設備については、比較的整った環境にある。 ・実習用機器については、整備委員会を設け、平成 22 年度から計画的に整備を進めている。 ・また、一部の科目では、実習内容の実技ビデオを学生に事前貸し出しするなどの工夫もなされている。
日 大	B	ほぼ適切である。TA を積極的に活用し、実習効果を上げているが、学生数に応じてさらに増員させることが望ましい。また、教員数の増加を考慮する必要がある。

② 実習に対する学生からの意見などをくみ上げるシステムは適切に運用されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	B	全ての実習について、学生による授業評価が実施されており、個々の実習についての学生の要望を聞くシステムが運用されている。学生からの要望については対応を説明している。
北里大	B	全ての実習に対して、学生による授業評価が実施されており、教育の改善に利用されている。
日獣大	B	各科目について学生評価アンケート（講義内容、教授法など）を取り、評価内容を次年度以降の講義、実習に生かすようにしている
麻布大	B	学生による授業評価制度があり、実習についても前年度の評価に基づいて内容を改善するよう努力している。
日 大	B	ほぼ適切に運用している。実習終了後に学生アンケートを実施し、それを教員がチェックすることで次年度の改善につなげている。ただし、このアンケートは、学生の無記名で実施されている。

VI 実習における連携などについて

① 実習について、他大学との単位互換は実施されているか？ 実施されている場合には評価などは適切に行われているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	なし	大学としては海外、国内大学との単位互換規定があるが、獣医学科では実施されていない。
北里大	B	国内の実習における単位互換は実施されておらず、今後の検討課題である。米国3大学とは、単位互換による実習を実施している。
日獣大	D	実習については他大学との単位互換は行っていないので、評価できない。
麻布大		実習の単位互換は行っていない。学内で必要最低限の実習を行うよう努力しているため、A～Dの評価は行わない。
日大		実施されていない

② 他機関の施設を利用した実習は実施されているか？ 実施されている場合には適切な相互協定などが締結されているか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	家畜衛生、公衆衛生およびそれら関連研究施設を利用した北海道庁主催の「保健所研修」を行っており、大学との相互関係も良好である。
北里大	C	米国3大学および中国吉大学での夏期研修での学外実習は、学部間の交流協定に基づき実施されている。しかし、国内の他機関の施設を利用した見学実習などでは、相互協定などは締結されていない。
日獣大	A	海外の協定校との間では正式な協定を結んでいる。
麻布大	B	3年次牧場実習および5年次専門学外実習を他機関の協力を得て実施している。特に外部機関との相互協定は結んでいないが、過去の実績等からできる限り適切な施設を選ぶようにしており、受け入れ先には実習受け入れの依頼文書を発行している。
日大	B	IV-3の⑦で挙げた学外実習の一部として実施されている学外見学実習があるが、特別な相互協定は締結していない。

③ 地域社会と協力した実習は実施されているか？実施されている場合には問題点なども含めて記載下さい。

大学名	コメント
酪農大	現在は実施されていないが、一部検討されている。
北里大	地域社会と協力した実習は実施されておらず、今後の検討課題である。
日獣大	今後、こうした取り組みを行う予定はあるが、現状では行っていない。地域との協力では、ボランティアだけに頼る訳にもいかず、新たな経済的な負担をどうするか最も大きな問題であり、大学当局にお願いすると同時に、自治体からの寄付講座などで対応できないか検討中。
麻布大	特に実施していない。
日 大	実施されていない

④ 実習について大学に倫理に関する規定はあるか？

大学名	評価	コメント
酪農大	A	実習事態に関する規定ではないが、実験に関する Bioethics について学内の規定がある。また、安楽殺処分に関する学内規定がある。尚、当該実習科目では動物を含め殺処分等の倫理規定に抵触する内容を含まない。
北里大	B	動物を用いた実習を実施する際には、事前に動物実験・倫理委員会に申請書を提出し、許可を受ける必要がある。
日獣大	B	動物実験に関する倫理規定はあるが、個々の実習内容は教員に任せているのが現状。患者を用いる実習（参加型実習）を始めるに当たり、新たな倫理規定を設ける必要があり、現在検討中。
麻布大	A	実習用動物取り扱いの倫理問題に関しては、「麻布大学動物実験指針」の中で規定が設けられている。
日 大	A	動物を使用した実習は実験動物倫理規定、実習で使用した試薬等の廃液については実験廃液に関する学部内規（IS014001）に則り、適切な実習が実施されている。